

東北に地縁と愛着を感じるからこそ、地域と育むデザインをしたいと思いました。

伊藤典博（デザイナー／合同会社スカイスター代表）

■アイキャッチ



▼リード

幼い頃から絵を描くことに興味を持ち、デザインの勉強に努めてきた伊藤典博さん。9年間の広告代理店勤務を経て、2012年に「合同会社スカイスター」を設立。デザイナーとして、第一線で活躍を続けている。これまでの経緯を辿るとともに、どうして仙台で会社を立ち上げるに至ったのか、その理由を聞いた。

▼本文

—まずはデザイナーになったきっかけを教えてください。

小さい頃から絵を描くことが好きで、絵を続けてきた延長でデザイナーになりました。子どもの頃は、よく両親に美術館に連れて行ってもらったり、幼稚園から小、中学校と絵画教室にも通わせてもらいました。高校は美術がしくて地元の美術部の活動がさかんな学校に進学し、部活と並行して美大受験のための美術研究所にも通いながら勉強していました。それと私は静岡県伊豆の玄関口に位置する三島市の出身なのですが、身近に画家や陶芸家などの作家さんがいらっしゃいました。小学生の頃は池田満寿男さんが審査する絵画コンクールに応募したり、黒澤明さんのアトリエが近隣の御殿場にあったり、文豪と言われる人も多く伊豆とゆかりがありますが、井上靖さんの姪が私の通う小学校の先生だったり、比較的、ものづくりや表現者といった事柄が身近にあった環境だったかもしれません。ですから、そうした著名な作家の方の名前も小さい頃から知っていましたし、作品にも触れていた

ので、そうした影響は大きいと思います。

—ということはデザインだけでなく、芸術分野について幅広く興味を持たれていたのですね。

そうですね。高校時代は美術大学への進学を希望していましたが、絵画や映画、演劇、写真、放送、音楽、文芸などの芸術分野にも関われるということで、日本大学藝術学部に進学しました。

—どのような大学生活を過ごされたのですか？

基本的には専攻するデザイン学科の課題、課題、課題の毎日でしたが、武蔵野美術大学や多摩美術大学の友人たちとグループ展をしたり、学内では他学科との交流もあり、私の場合は特に演劇学科の人たちと仲良くさせてもらいました。演劇学科の人たちの中には、すでに子役の頃からテレビや映画で活躍していたり、学生時代から劇団を旗揚げして小劇場等で公演していた人も多くいたので、仲間との広がりの中から劇団の宣伝美術を担当させてもらっていました。そこから、舞台や芸能関係のお仕事を紹介いただいたりして、徐々に仕事の感覚というか、デザインの現場に近い環境で学生時代を過ごしました。



学生時代に演劇学科の友人関係から広がった演劇のフライヤーデザイン

—その後は、どのような道を進まれたのですか？

卒業後は日本大学大学院の芸術学研究科に進み、造形芸術の研究と、引き続き舞台や芸能関係の宣伝美術に携わりながら過ごしました。2年間の修士課程を経て、広告代理店のクリエイティブ課にデザイナーとして就職しました。静岡、神奈川、東京といった首都圏を中心に3年間勤務した後、東北支店へ異動になったのをきっかけに仙台へ移り住み、今現在も仙台に住んでいます。会社員時代は、観光や交通、流通、食品関係など、さまざまなマーケットでプロモーションやキャンペーン広告のデザインに関わらせていただきました。各地の地域性や特色を感じながら、デザインに関わってきた感じです。

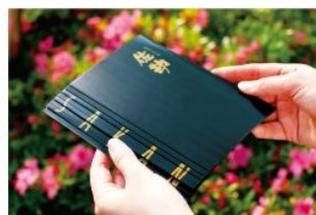
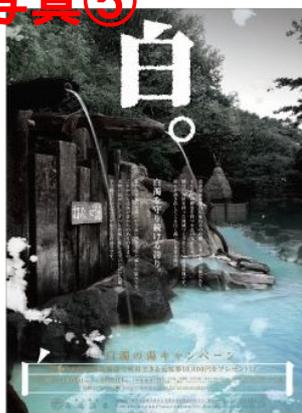
—学生時代と会社員時代で、感じたことの違いはありますか？

当時勤めていた会社は東北から九州まで10カ所以上の支店があるのですが、いろいろな地域の仕事ができたら楽しいだろうな、という魅力を感じました。その中で特に勉強になったのが、観光関係の仕事です。観光分野は当然、各地の特色をベースに景観や交通や産業、歴史や建築、祭りにグルメ、地区の取り組みなど、あらゆる要素を横断した思考の中でデザインの役割や可能性を探りながら目的に向かって走ります。ですから観光資源をどのようにつくるのか、生かすのか、あるいは見直すのか、地域について引いたり寄ったりしながら、さまざまな視点で継続的に捉える必要があります。そういう意味では、都内で限定して過ごした学生時代と、会社員時代の感じる視点の違いは大きくあると思います。

写真④



写真⑤



ポスター、新聞、パンフレットなど各地で手がけた観光のキャンペーン広告

—仕事も順調に進んでいた中で、なぜ独立を意識されたのでしょうか？

広告会社では仕事の起点や窓口は、営業の方が中心に展開されます。私は表現やアプローチ、着想点などアイデアやヴィジュアルに関わる部分は、クリエイターが直接お客さんにご案内することが必須で、加えてクリエイターがプロジェクトのプロセスやタイムリーな動向、お客さんの気持ちの変化までチェックできると、よりデザインの精度が上がると感じてきました。もちろん、組織の中での役割と対応はそれぞれですが、よりお客さんと目標なり課題とデザインが密着した関係を築けたらと考えていました。そうした考えの中で、首都圏の各地や東北で10年近くデザインに携わり、年齢的に30歳を過ぎタイミング的にデザイナーとしての経験値の中で一度は独立をと思い、そのときの環境を踏まえ、自分の気持ちや思いを優先して決断しました。

—ただ、地元に戻ったり、首都圏に戻ったりする選択肢もある中、どうして仙台を拠点にすることにしたんですか？

やはり、震災がもっとも大きな理由のひとつですね。もちろん今もそうですが、特にあの当時は東北で暮らし働く人の多くが「なんとかしなきゃ」という強い気持ちの中で過ごしてい

たと思います。震災後、ふるさとの東北に戻って来られた方がいらっしゃったのも、そういう理由だと思います。東北の人々ならではの風土といいますか、助け合いや、頑張り屋の気質といいますか、そうした環境の中で、あの時期に仙台を離れるという考えは浮かばなかったです。また、それまでの6年間を仙台で暮らして、東北のいろいろな方に親切にしてくださいました。だからこそ、今度は自分から地域に溶け込んで、東北の地域と育むデザインをしたいと思うようになりました。

(後編に続く)

仕事をしていく中で生まれた地縁を、もっともっと膨らませていきたいですね。

伊藤典博（デザイナー／合同会社スカイスター代表）

■アイキャッチ

写真⑥



▼リード

東日本大震災から1年後の2012年に「合同会社スカイスター」を設立した伊藤典博さん。来年には会社を立ち上げてから10年の節目を迎える。今後チャレンジしていきたいこと、そして大切にしたいことは何か。これまでの活動を振り返りながら、将来の展望を伺った。

▼本文

—震災から1年後の2012年に、同じくデザイナーの安保満香さんと「合同会社スカイスター」を設立されましたが、なぜ合同会社という形をとられたのですか？

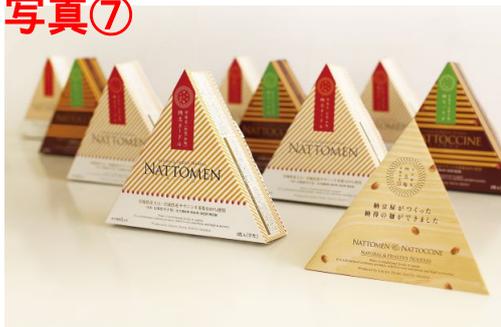
前職の広告代理店では当然、いろいろな人の力があって仕事が成立するので、そうした経験をさせていただいた点も踏まえながら、独立後も自分以外の視点や、捉え方、対応面といった体制を考えました。そうした中で、いくつかのスタイルを検討しながら、最終的には自分たちのデザイン業務の内容や少人数でのメリット、当時の環境や希望なども考慮しながら、合同会社という形にしました。

—ちなみに独立後はどのような仕事が多いですか？

立ち上げの当初は、前職の会社や他の広告代理店さんからお仕事をいただいたりすることが多かったです。3年目ぐらいから、少しずつお声掛けしてもらえるようになり、とうほく

あきんどでざいん塾（現：So-So-LAB.）さんにも企業さんとデザインマッチングしていただきました。今は直接ご相談いただく仕事を中心にしています。業種としてはどれかに特化しているわけではありませんが、目標や課題の整理から始まり、会社や商品コンセプトの可視化とロゴの開発といったヴィジュアルの核になる部分から、周辺のヴィジュアル整備、販促ツールなど、段階的な流れを考慮しながら派生していくこともあります。

写真⑦



写真⑧



写真⑨



写真⑩



写真⑪



伊藤さんがデザインした実績の数々。ユニフォーム、グッズ、パンフレットなど、多くの種類のデザインを手掛けている。

—2人で仕事をすることでのメリットはどこですか？

やっぱり意見交換ができるのが良いところですね。それに、女性側の視点で考えたらどうなんだろうとか、ものを違った角度から見ることができます。1人が依頼いただいた仕事も共有して進めることで新たな気付きや発見も生まれますし、たまに自分が考えたプランでも社内のウケが良くなかったらあっさりやめたりすることもありますね（笑）。

―ちなみにスカイスターでは社員のほかに、クリエイティブパートナーとして2名が携わっています。

イラストレーターの島本剛さんは静岡在住で私が首都圏で働いていたときの同僚、コピーライターの高橋久美さんは東北支店に勤めていたときの先輩で、両名とも独立してからも仕事をお願いしたり、相談をしたりという間柄です。お客さんにとっては広報業務に携わらないと、こうしたクリエイティブの専門職の人たちと接する機会はなかなか少ないと思いますし、仕事を進めていくうえで分かりづらい部分もあるかと思います。ですから、社内で協力体制を深めることで、こちらがデザインをご案内する際に分かりやすく解説できますし、お客さんも専門家から丁寧なアドバイスを受けることで安心できる部分もあると思っています。お互いのスタイルを尊重しながら、バランスを考慮して、クリエイティブパートナーとしてお願いしています。

―ひとつの「チーム」として仕事をしている分、とても心強いのではないのでしょうか？

それはもちろんありますし、いちばんはお客さんに喜んでもらえるのがうれしいですね。私ももちろんそうですが、自社のことや自分のことを上手に伝えるって、とても難しいですよ。お客さんと打ち合わせをする中で、ニュアンスは説明できるけど、実際に言いたいことを言葉でまとめるのは難しいよね、というケースは多々あります。そうしたときに、コピーライターが代弁してくれる、イラストレーターが絵に置き換えて提案してくれる。だから「え〜、こうなるんですね！」と言っただけです。お客さんだけでなく、私も発見や共感、驚きやユーモアのあるアイデアが生み出されるので、デザインメッセージに奥行きが出ますし、チームで創り上げるクリエイティブワークの醍醐味のひとつだと思います。

写真⑫



―ちなみに、今後チャレンジしていきたい、携わってきたい分野などがありますか？

いろいろと思案している中で、実際に具体化したひとつに、学生時代から芸術学を勉強する中で美術と福祉、医療のマッチングという部分に、興味を持っていました。美術やデザインが持つ可能性だったり社会での役割を考察する中で、クライアントの方々とデザインを創り上げる一方、デザインの展開の可能性についても、新しいアプローチで取り組みをしていきたいという思いは心のどこかにありました。2016年に仙台市と市民がともに問題解決を目指す、市民協働事業提案制度（※）に参加し、障害のある方が描いた絵を、取引先の仙台の老舗染物屋、武田染工場さんに手ぬぐいにしていただいて商品化し、八木山動物園で販売をしました。こちらは2018年の全国障害者スポーツ大会の福井大会で宮城県選手団の行進フラッグにも採用いただきました。同じ年には再度、同制度に参加し、描いていただいた絵を楽天野球団の応援グッズとして商品化し展開しました。自分自身や自社でやれることは限られてますが、「デザイン×福祉×今まで関わりのなかったフィールド」といった掛け合わせで、何らかの新しい分野で地域へデザイン参加ができれば良いかなと思っています。そして、問題解決に向けた仕組みづくりや取り組みへのきっかけになるようなデザインができたと思います。

※仙台市市民協働事業提案制度…地域の身近な課題について仙台市民の提案をもとに仙台市と協働で解決していく制度。団体の専門性やネットワークを生かし、仙台市とともに取り組むことで地域のニーズにこたえる事業。

—最近ではそのような取り組みも全国的にさかんになっているとお聞きます。

そうですね。たとえば「インクルーシブデザイン（※）」という、イギリスで生まれたデザイン手法があります。大袈裟ではありますが、デザインを通して、社会の役に立てたり、課題を解決したりすることができる。自分が関わっているデザインを転化することで、社会や未来にとってプラスになる事柄が生まれるかもしれないという可能性は日々の仕事の中で感じるがあります。また、できる範囲ですが臨床美術士（※）として、福祉施設や就労施設でクリニカルアートを通した活動を主に仙台市内でしています。まだまだ勉強中ですが、デザイナーとして、臨床美術士として、会社あるいは個人的にも何かしら取り組んでいけたらと思っています。

※インクルーシブデザイン…高齢者、障害者など、デザインプロセスにおいて従来は除外されてきた人々をプロセスの上流から巻き込み、多様な視点から新たなデザインを考える手法。

※臨床美術…絵やオブジェなどの作品を創ることによって脳を活性化させ、高齢化の介護予防や認知症の予防・症状改善、働く人のストレス緩和、子どもの感性教育などに効果が期待できる芸術療法（アートセラピー）のひとつ。医療・美術・福祉の壁を越えたアプローチ

が特徴。



写真⑬



写真⑭

写真⑮



左上・左下／八木山動物園で商品化した手ぬぐいデザイン「ZOO ZOO DESIGN」シリーズ（左下写真提供：NPO 法人エイブル・アート・ジャパン、写真：三浦晴子）
右／楽天野球団で商品化したデザイン「EAGLES RAINBOW」シリーズのトートバック

―来年でスカイスターは設立 10 年目を迎えます。これからの意気込みや展望などがあればお聞かせください。

会社を設立してからずっと、仙台市若林区の卸町にある TRUNK（クリエイティブシェアオフィス）に事務所を構えてきました。ここでは、入居するクリエイターがそれぞれの知恵や技術を持ち寄って、新しいビジネスモデルやライフスタイルの創出と、よりよい社会の実現を目指す、というコンセプトを掲げています。そうした考えはとても大事なことだと思っています。継続している活動のひとつとして、TRUNK に入居するカメラマンやデザイナーの仲間と共同で卸町の賑わい創出を第一に「どこでも写真館 cuicui」というプロジェクトを主宰しています。卸町の地域のお祭りや、不定期ですが仙台市内の店舗やイベントに合わせて開館しています。おかげさまで、ご家族やカップル、お友達同士から赤ちゃんまで、たくさんの方が記念撮影にいらして下さいます。規模や内容やアイデアはそれぞれに、そうした取り組みや楽しみ方が身近でもっと増えていけば、クリエイティブ分野も他の分野もお互いに盛り上がり、助け合ったり、新しい関係が始まるきっかけになるのかなと思って

います。また、クリエイター同士はもちろんですが、これまで拠点としてきた御町の企業さんと一緒にお仕事をしていく中で、地域との縁も多く生まれています。そうした「地縁」が地域全体の中からたくさん生まれて、膨んでいけたらいいですね。

写真⑯



写真⑰



TRUNK のメンバーと共同主宰している「どこでも写真館 cui cui」の PR デザイン

取材日：令和 2 年 3 月 3 日

撮影協力：宮城県美術館

取材・構成：郷内 和軌

撮影：小泉 俊幸

■ 経歴

写真⑱



伊藤典博

1979 年生まれ。静岡県三島市出身。日本大学藝術学部デザイン学科、同大学大学院芸術学
研究科の修士課程を経て、広告代理店に入社。首都圏、東北エリアで勤めた後、2012 年に
合同会社スカイスターを設立。受賞歴少々。ロゴデザイン、イラストレーション、パッケー
ジデザインなど、企業・行政・団体・教育機関などのさまざまなデザインの企画、制作を手
掛けている。